

保護者に伝えたい

「親から子へ かかわりの糸を結ぶ7つの言葉」

第1回

よりよい学級経営を目指す私たち教師は、子どもに対する日々のサポーター。そして、時には子育てに悩む保護者に対するサポーターでもありたいもの…。保護者が元気になれば、きっと子どもも元気になります。



名城大学 教授 教職センター長

曾山 和彦

群馬県桐生市出身。東京学芸大学卒業、秋田大学大学院修士課程修了、中部学院大学大学院博士課程修了。博士(社会福祉学)。東京都、秋田県の養護学校教諭、秋田県教育委員会指導主事、管理主事、名城大学准教授を経て、現職。学校心理士、ガイダンスカウンセラー、上級教育カウンセラー。学校におけるカウンセリングを考える会代表。

著書に「時々、「オニの心」が出る子どもにアプローチ 学校がするソーシャルスキルトレーニング」、「時々、「オニの心」が出る子どもにアプローチ2 気になる子に伝わる言葉の「番付表」(明治図書)、子どもに学んだ「王道」ステップ ワン・ツースリーI「教室でできる特別支援教育」II「教室でできる関係づくり」I「親から子へ かかわりの糸を結ぶ21の言葉」(文芸春秋)、編著書に「気になる子への支援のワザ」(教育開発研究所)、「特別支援教育に生かせるカウンセリング」(ぎょうせい)ほか多数。

私たち教師は、担任、養護教諭、管理職等々、さまざまな立場で、保護者の子育ての悩みに向き合うことがあるでしょう。親と子の間に「かかわりの糸」がしっかりと結ばれたならば、日々の子育ては、きっと楽しくなり、笑顔あふれるものになっていきます。私たち教師は子どもたちのサポーターであることはもちろん、時には、悩める保護者のサポーターでもありたいものです。そこで、今回から3回シリーズで、保護者が、口や耳になじませておくことよい言葉を、拙著「親から子へ かかわりの糸を結ぶ21の言葉」の中からセレクトしてお伝えします。それらの言葉を、個別面談やPTA懇談会等の機会にご活用いただくと嬉しく思います。

れたhitotsume誌面では、「幸運」の代名詞ともいえる数字「7」にあやかり、「7つの言葉(7 Selections)」としてお伝えします。シリーズ初回である本稿は、「出版記念講演会感想」と「保護者に伝えたい! 7つの言葉(7 Selections)」&「Selection 1」について。それでは、スタートです!

出版記念講演会
参加者の感想から

● 曾山先生の講演は素晴らしいかったです。3人の子どもがいて母子家庭なので毎日子育てに悩んでいます。先生の話にあったことを実践できるような頑張りたいです。

● 昨年PTAの講演会で曾山先生の話を聴き、日々の生活が変わりました。子どもたちにも夫にも、私のかかわり方が変わり、家の中が明るくなり、リビングに皆が集まる時間が増えました。

● 21の言葉以外にも、「ありがとう」は「最幸」の言葉」が心に残りました。

● 2時間があっという間ででした。曾山先生の話がわかりやすく、聴く人を魅了する、惹きつけるものがあった、学んだ全てが勉強になりました。

● ゼミの学生さんの動きがとてもよかったです。曾山先生の日頃の指導の温かさがそこかしこに伝わってきて、素晴らしい教育をなさっていることが感じられ、ますます先生を尊敬する気持ちが増えました。

● 「『型』の中に見いだす違いが『個性』になる(言葉10)」。個性という名の下でわがままにやらせていたと反省しました。

● 21の言葉はどれも素敵ですが、私は1位「今、見ている景色を楽しむ(言葉6)」、2位「笑うから幸せになる(言葉21)」、3位「倒れずにいられた理由を考えてみる(言葉

20)」。それぞれがそれぞれの受け止め方で自分の生き方に役立てていける言葉だと感じました。

● 曾山先生の話し方には、押しつけがましいことが一つもなく素直に受け止めることができます。それはきっと「正しいことを言うときは少しひかえめに言う(言葉1)」を先生ご自身が実践されているからだと感じました。いろいろ悩むことはありますが、「今、見ている景色を楽しむ(言葉6)」を大切に頑張りたいと思います。

● 「『型』の中に見いだす違いが『個性』になる(言葉10)」がとても印象深かったです。それは今まで感覚だけで伝え、失敗したと感ずることが多かったからです。

● 「『私』の気持ちを伝える(言葉5)」。いつも意識していましたが、高学年の子どもには本当に効果があると感じています。

● 「考え次第で悩みは消える(言葉8)」、「ストロークバウンドを『プラス』にしておく(言葉19)」、「倒れずにいられた理由を考えてみる(言葉

20)」。曾山先生の一言一言が心に残る講演でした。

● 「子どもが持っている『グロップ』に『ボール』を投げる(言葉18)」を大切に教壇に立ちたいと感じました。

● 自分たちの自尊感情を育むということが心に残りました。また、「笑うから幸せになる(言葉21)」は、最も共感して学んだ言葉です。

● 「考え次第で悩みは消える(言葉8)」。子どもの「見方」を変えて「味方」になる親として子育てを頑張りたいです。



講演会風景



ソーシャルスキル・トレーニング「ゴリラとゴリラ」



ソーシャルスキル・トレーニング「ジャンケン手の甲タッチ」

の「登山(変化成長)の様子」が気になるのは仕方ないことです。しかし、周りにばかり目を向け、「あの子はもうあんなに高いところまで登っている。うちの子も早く登らせなくちゃー」と、子どもの手を引き、背中を押し続けると、やがて座り込み、中には、山道を登るどころか下りてしまいう子どもも出てきます。目の前の子どもの「体力(例えば、『知徳体』)は一人一人異なります。保護者は、日々のかかわりの中で、子どもの「体力」を見取りながら、「今見ている景色」、すなわち、現状において子どもが「できていること・やれていること・いいところ」等に目を向け、その「姿」を喜ぶたいものです。そのため、私たち教師ができるのは、保護者が見ていない学校での「景色」を、やはり「できていること」という観点で捉え、それを伝えることです。保護者も教師も「今見ている景色を楽しむ」ことを共有し、「子どもと共に「登山」を続けるならば、これから目の前に現れるどんな急峻な山道であろうと三者が手を携え、諦めることなく山道



講演会スタッフ(曾山ゼミ生)

を歩き続けることができるでしょう。そして、最後には三者が笑顔で、「頂上に着いたね」と達成感を分かち合うことができるでしょう。「登山」の途中で見える景色は、立ち止まるその都度その都度、異なります。その全てを「ここから見える景色もいいね」と伝え合うことができる教師と保護者になれたら…。そこには子どもにとって最強の「登山サポーター」が誕生します。今、見ている景色を楽しみながら、共に子育てという「登山」をしていきましょう！

叱ったらいいの？ 褒めたらいいの？
今どきの子どもとのかかわり方がわかる

曾山和彦先生
新刊

親から子へ
かかわりの糸を結ぶ 21の言葉

名城大学 教授 曾山和彦 著

「子どもと、どう接したらいいのかわからない」
「今どきの子どもが何を考えているのかが理解できない」
こんな子どもとどう接していいのかわ悩んでいる親御さんに、
曾山先生が、カウンセリング、心理学、特別支援教育の観点から、
考え方やノウハウを伝授。
伝えたい「21の言葉」がぎゅっと詰まった1冊。

どの家庭でも起こりうる事例をマンガで紹介。
今どきの子どもとのかかわり方を「21の言葉」を介して解決へと導きます。

正しいことを言うときは少しひかえめに言う 言葉はスリムなほど伝わる
今、見ている景色を楽しむ 関係づくりの第一歩は相手への関心から
子どもが持っている「グローブ」に「ボール」を投げる

判型 A5判
ページ 200ページ2色刷
定価 本体1,500円+税
発行 文溪堂

保護者に伝えたい!
7つの言葉(7 Selections)

アンケートの内容を踏まえて、
7つの言葉をセレクトしてお伝えします。

- Selection 1 今、見ている景色を楽しむ(言葉6)
- Selection 2 考え次第で悩みは消える(言葉8)
- Selection 3 笑うから幸せになる(言葉21)
- Selection 4 子どもが持っている「グローブ」に「ボール」を投げる(言葉18)
- Selection 5 「型」の中に見いだす違いが「個性」になる(言葉10)
- Selection 6 倒れずにいられた理由を考えてみる(言葉20)
- Selection 7 「私」の気持ちを伝える(言葉5)

●「笑うから幸せになる(言葉21)」。この言葉のとおりだと感じるのが日頃多いです。笑顔で過ごすことで、自分だけでなく、周りの人も笑顔になり、皆が明るく元気になるような気がします。これからのこの言葉を胸に過ごしていききたいです。

●「今、見ている景色を楽しむ(言葉6)」。自分が好きなことと得意なことよりも苦手なことや嫌いなことを強く受け止め、自分にOKと言えなかつた過去がありました。し

●「考え次第で悩みは消える(言葉8)」。物事を悪い方向に膨らませるのではなく、良い方向に変えていくことで気持ちも楽になると感じます。

●「今、見ている景色を楽しむ(言葉6)」とあるように、苦手なことがあっても頑張っている自分や、ちゃんと受け止めている自分に対して、頑張っている！OK！と思うように心がけるようにしてから、また頑張ろうという気持ちが大きくなり、毎日の頑張りの励みになっ

出版記念講演会参加者の声として、この言葉に「元気をもらった」「確かにまだ見ない先のことはかなり心配している自分に気づいた」等の感想が最も多く寄せられ、印象的だったことがわかります。私が、この言葉を使うようになった「原風景」は、今からちょうど15年前(平成14年)、秋田県総合教育センター指導主事として、保護者との教育相談業務を行っていた「日々の景色」にあります。当時、相談室の中で、私が見ていたのは、発達障害、不登校等、我が子の状態に悩んだり、うまく子育てができない自分自身について悩んだりする保護者(主に母親)の姿でした。元気をなくし、笑顔の

この言葉を大切にし、人とのかかわりにおいて、リフレミングを周りの人にも日常的にできるようにしたいと思っていました。

Selection 1
今、見ている景色を楽しむ(言葉6)

消えている保護者を前に、当時の私が「これだ！」と言えるような解決策を提示できたわけではありません。それでも、定期的に相談に訪れる保護者に「〇〇さんいつも遠くから、しかも早い時間に相談に来てくださってありがとうございます」と挨拶すると、険しい表情が緩み、時には笑顔になることもありました。その時、私は「悩みを抱えて動けない人もいます。でも〇〇さんは『相談』に動いている。それが〇〇さんのリソース(資源・財産)」と気づき、「動いている『今』を認める喜ぶ」という捉え方を保護者との相談活動の中で大事にするようになりました。

この捉え方は子どもを見る上でも大切です。「昨今の頃は、授業中ほとんど席に座っていることができなかったA男。でも今は…」 「小学生の頃はテストで間違うことが許せなかったB子。でも今は…」などと考えることで、保護者との相談場面では、共に子どもの成長を認め、喜び合える時間ともなりました。

保護者として、周りの子どもたち